

# 4月学習会の案内 第50回「資本論を読む会」

日時：4月24日（月曜日）

午後6時30分 Zoomで開催

「第18章 時間賃金」(岩波文庫p62-74)

4月9日投票の知事・道議選挙、地方選挙の真っ最中、3月27日の「第49回資本論を読む会」にはいつものメンバー10名が都合をつけて参加してくれました。今回議論したのは「第17章 労働力の価値または価格の労働賃金への転化」。

そうです！資本論のキモ？ 活動を始めた頃の入門書「賃価利・賃労働と資本」で鍛えられた「労働と労働力の違い」「価値の実態は…」といった展開です。「ナーンダ、資本論が急に分かりやすくなったと思ったら…」との声も出ました。今回から労働賃金論が続きます。多分に復習をやっているみたいな感じがしなくてもありません。議論の中では「公務員労働者の搾取の構造は?」「対当局交渉ではどういう追求の仕方を?」といった意見で少し白熱。今年の春闘総括は、どういう議論になるのかな…。

次回は「第18章 時間賃金」そして「第19章 出来高賃金」「20章 労働賃金の国民的差異」と続きます。分かりやすく面白い議論が出来そうですね。

懇親会では、やはり知事選や道議選の話題や、JP職場の問題などで遅くまで意見交換しました。「みんなと一緒にやれば何とかかなります」。今からでも新規参加を歓迎します。連絡下さい。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから - Sugi ~~~~~

## 第6篇 労働賃金 第17章 労働力の価値または価格の労働賃金への転化

○ブルジョア社会の表面においては、一見すると労働者の賃金は、労働の価格としてみられる。従って、一定量の労働に対して支払われる、一定量の貨幣として現れる。つまり、労働が売買される商品としてあらわれる。

p50-8労働が商品として市場で売られるためには、売られる前に存在していなければならない。労働は売られる前に存在することはない。元々、労働は価値の実体ではあるが、価値を持ったものではない。

労働は商品の中に対象化されて初めて価値となる。

p52-11直接資本家に相対するのは労働ではなく、労働者である。労働者が売るのは、その労働力である。

・労働力の使用過程が労働であって、労働が実際に始まる否や、それはすでに労働者のものでなくなり、従って彼によって売られることはできない。

・労働は価値の内在的尺度であるが、それ自体は何ら価値を持たない。労働の価値とは労働力の価値のことである。

・労働の価格という表現は、価値概念が全く消し去れているだけでなく、搾取関係を隠蔽する以外のなにものでもない。

p54-古典派経済学は、価値をつくるということ(労働)と、価値をもつということ(労働力)とは、まったくの別の事柄であることを明確に認識できなかった。

・労働賃金という形態は、労働日が必要労働と剰余労働とに、支払い労働と不払い労働とに分かれていることの痕跡を全く消し去ってしまう。よって、全労働(1労働日)が支払い労働として現れる。(見えてしまう。)

p58-労働力の価格を労働の価格のように見せ、先の労働賃金の形態に転化させることの決定的な重要性が理解される。

それは労働者と資本家の法律的観念、資本主義的生産様式のすべての欺瞞、そのあらゆる自由の幻想、ブルジョア経済学の弁護論的空論の基礎となっていることを理解させる。

・資本と労働との間の交換は、すべての他の商品の売買と全く同じように見えるから。買い手は一定額の貨幣を与え、売り手は一商品を与えるという関係をそのまま賃金関係に移しかえていることがあげられる。

・賃金は、労働者が労働したから(その後)、その労働に対して支払われるように見えるから。

p60-賃金が労働力の価値として支払われるのではなく、労働の価値として支払われている現象を呈している。

# DAS KAPITAL

